

親子の「似より」と女子学生の性格との関連

秋 山 幹 男

Relationship of the Similarity of Parents and Child (Daughter)
and Female Students' Personality

Mikio Akiyama

思えば月日の立つのは早いものである。1972年本学に赴任した当時、最初の講義の為に手にしたテキストは、津留宏編の「青年心理学」であった¹³⁾。西平直喜の担当執筆の箇所から、自我同一性の測定のために彼が工夫した性格項目と、E. H. Erikson の Life-cycle 理論が筆者の目を捉えた。その時に姿をみせたものが「自我同一性 (ego-identity)」の概念であり、S. Freud の「同一視 (identification)」概念の再認識であった。現代の青年心理学を構成している諸データは、このようにして手に入れていくものなのかという新鮮な感動であった。以来、青年期の発達課題と危機の内容である「自我同一性と同一性の拡散」は、私の青年に対する思考枠となっていた。同年12月、何の恐れもなく、初めての調査用紙を作成した。気になる言葉とか、「青年らしさ (女性としての)・「自分自身」「自分の母親」「自分の父親」・「子どもらしさ (女の子)」・「大人らしさ (女性)」の性格などについて、回答者の苦勞も考えず、とにかく膨大な量の調査を学生達に依頼してしまった。この時のデータの一部を用い、初めての論文は1974年に公にした¹⁾。①自分と青年らしさ、②自分と両親について、学年による比較と性格(MPI)による比較という二側面から追究したものであったが、随分と欲張ったものであったし、気負いもありすぎた。

1972年に開始した調査は、綴じ込みの内容を省略しながら、その後3年間持続していった。当時の1年生が4年生になるまで追跡した第Ⅰ期のものである (なお、第Ⅱ期は1982年から1985年にかけて実施されている)。結局、「青年らしさ」・「自分自身」・「母親」・「父親」の4つの評定対象が生き残ってきた。1980年に第2の論文が仕上がった²⁾。1974年から数えて6年後、気の遠くなるような努力であった。さて、その後は、西平直喜の75の性格項目をいかに親子の性格を調べるものに変えていくかということと、項目削減への踏ん切りの努力が続いていく。1981年の論文で7区分表示法が名乗りを上げた³⁾。しかし、この段階では上記の割り切りはできず、1985の有馬道久*との共同研究⁴⁾でコンピュータによる因子分析の際にやっと56項目だけに決めた。56の性格項目は、4つの人格認知因子 (次元) の中に42コ取り込まれ、2コは重複負荷をし、残りの12コはどれにも負荷しなかった。これは、3つの評定対象「自分」・「母親」・「父親」に対する女子学生の回答のすべてを込みにして処理された結果得られたものであった。このようにして西平の75項目は、現在の56項目で片付いた。4つの人格認知次元に含まれなかった14項目は「その他」という形でそのままにしておいた。

1981年の論文³⁾では7区分表示法を正式な形で紹介し、これに基づく5つの認知タイプの抽出が群分けのために使用されるようになった。だが、この方でも問題が生じた。つまり、7区

* 当時広島大学教育学部助手、現在は香川大学教育学部助教授

分の出現率を取り込んでタイプ抽出ができるのは長所なのだが、分析に用いることのできるデータは半分位しかなくなるという大きな短所があったのである。この点に関しては、前述した因子分析の結果抽出された4つの因子ごとの平均得点をもとに、クラスター分析を試みた時に一つの解決法が得られた。コンピュータが似よりという捉え方をしていることに注目したのである。この新しい概念は、自分と両親の性格の「似より (similarity)」として、7区分表示法で群分けするにも十分活用できると気付いたのである。この方法では、調査したすべてのものが使用できるというメリットが生じる。ところが、これまで収集し分析してきたデータはすべて、認知タイプ抽出のために処理されている。そこで、これらのデータと未処理のまま放置されていたデータもあわせ、「似より」を基にした新しい群作りに入り、すべての計算を1からやり直すというまた膨大な単純作業に突入し、やっとどうにかまとめ上がったのが、1988年の論文⁵⁾である。実に3年のこれまた苦しい作業であった。ところが、ここでも問題が残った。それは、3つの評定対象に対して「はい」・「いいえ」で評定された項目の数について回答者内に差がでることが多いということである。56項目がすべて「はい」・「いいえ」の判断だけになっていけば、分母は56で済むのである。しかし、「どちらともいえない」という判断を我々はよくするために、「はい」・「いいえ」の反応項目数はそれだけ減っていく。そこで、従来は、7区分表示をする場合、例えば、三者共通区分ではその区分内をさらに3つに分け、自分・母親・父親の3つの出現率の記入が必要となるように、7区分全部では12回の計算処理がある。それは分子は同じなのに分母の個数が変化してしまうためなのである。とにかく1人のデータを出すのにもかなりの労力と時間がいったのである。1988の論文⁵⁾でもこの方法で処理がなされている。

わかってしまえば簡単なことで、まさにコロンブスの卵なのだが、実に涙ぐましい努力の末、やっと3つの評定対象ごとの「はい」・「いいえ」の選択項目数を分母にすることを止めた。それは、「どちらともいえない」という項目数を捨てるのではなく、取り込んで56項目のすべてを分母とすればよかったのである。出現率にして煩瑣にするよりも、7つの区分のなかに「はい」・「いいえ」で評定された項目が何コはいったかをそのまま素直に用いればよかったのである。わかってみれば当り前の事だが、再びデータの手直しである。その間4年。やっと個数で処理したデータが揃ってきた。「はい」と「いいえ」の項目数を分母にした分析法と56項目を分母として処理する分析法では、若干の差が生じた。親子の「似より」の群分けをする場合、別の群に入れ変わる者が少人数でできた。しかし、大きな修正を迫るほどではなく、少し群間の差が縮まった程度に留まっていた。ところが、またも心の中に疑念が生じ、今少々困りかけている。それは、56項目のうち42項目だけが4つの人格認知次元を構成しているということである。残りの14項目は「その他」として一括して1988の論文⁵⁾でも取り入れ、本研究でも使用しているが、「その他」は取り除けて、42項目だけで自己と父母の性格認知を調べる方が、すっきりしていてよいのではないかと思い始めているのである。とにかく、分析処理のベースが絶えず変化し、その度に簡素化ができていくことは嬉しいのであるが、前のデータと照合する場合には、どうしても2種類の分析を比較しつつという歩みとなる。とにかく大変なのである。「牛歩千里」ということばを恩師酒井行雄教授 (故人) からいただいたが、どうしてこうも要領の悪い研究しかできないのだろうか。

一方、1980年から現在までの学会誌や全国の大学の紀要にある文献を、国立国会図書館作成の「雑誌記事索引」より抜き出し、カードに転記し、必要なものから論文を収集するという作業を続けてきている。今回は、収集した論文のなかから本研究に関係のあるものをピックアップ

ブし、自分の研究の位置づけを試みるべく熟読を始めた。また、1991年発行の今泉信人・南博文編「人生周期の中の青年心理学」で第Ⅲ部青年期の対人関係のなかの第8章家族関係 (P. 108-122) を担当執筆した⁸⁾。この一連の作業の中から新しい視点を発見した。とはいっても、そのことは1960年代から囁かれ始めていたことであるらしいが、まったくこの二つの作業をするまでは気付かなかったのである。青年期の家族関係の文献を調べていた時、岡堂 (1987) の「反抗期という現象は終焉したのではないか」という問題提起にぶつかったのである¹⁶⁾。以下家族関係の執筆部分から引用してみよう。

従来、青年期は疾風怒濤の時代とかアイデンティティの危機時代とか呼ばれ、青年期の反抗現象は必然的なものとしてみなされてきた。シカゴ郊外に住む高校生2万人を対象とした1962年から1981年にかけての19年間にわたるオファーら (Offer, D. et al 1984) の追跡研究によると、健康で内的外的なストレスに適切に対応し、家族や仲間との関係も円満で、けなげに成長した高校生は全体の80%であった。残りの20%の子どもたちが、いわゆる青年期の問題を持ち、アイデンティティの危機に直面していたという。岡堂は、今やオファーらがとなえる正常学 (normatology) の視点にたった青年たちの心理の見直しが必要かもしれないといっている (P. 111-112 より)。

これは、その後本研究の文献解読を進めていく作業のなかからも見い出された。八木 (1987)²⁷⁾、高石 (1988)²³⁾、藤井 (1983)⁹⁾ の記述である。八木は、精神病理学的アプローチである古典的見解に対し、主として調査に基づく経験的見解として、青年期に対する二つの見解を紹介している。「1970年代後半以降、アメリカはじめ西欧諸国では、一般に考えられてきた世代断絶論や『疾風怒濤』の青年期論を反省する動きが生まれてきた (P. 79 より)。」また、「Offer, Offer の見解として、3つの発展類型：①連続成長グループ (Continuous Growth Group)、②動揺成長グループ (Surgent Growth Group)、③動乱成長グループ (Tumultuous Growth Group) が取り上げられてきたのである。」さらに、「Erikson の identity-crisis の用語に替って、identity-exploring を使用することを提唱している。Marucia, Grotevent (P. 89 より)」とも述べている。高石は、「1960年代後半になり、主としてアメリカで、伝統的な危機説を反証する形で“青年期平穏説”が唱えられ始め (村瀬 1976)、一般青年の多くが何ら危機を体験しないでこの段階を通過する、という調査結果が発表されるに及んで、青年期の危機性をめぐって、それまでの研究は見直しを受けることになった (P. 211-212 より)。」と記述している。また、藤井によると、「青年期を危機とする見解は、これらの研究によって部分的に実証されたものの、結果は必ずしも一貫したものではなく、矛盾した調査データに基づいて『青年期平穏説』が主張されるなど、かなり混乱した様相を呈しているのが実情である。(Coleman 1980, 村瀬 1976)——P. 77 より」とある。

1988の論文⁵⁾では、Erikson の理論を半構造化面接法で調べようとした、Marcia, J. E. の研究である「自我同一性地位」との関連で、青年女子の自己と父母の性格の「似より」の分析結果を解釈しようと試みた。が、今一つ自分のデータをしっかりとその地位の中に位置づけられないという印象をもったことを覚えている。それは、特に似より「大」群の女子学生達の存在であった。一方、似より「小」群の者は何となく、Erikson 的なものである。吉本 (1985)³⁰⁾によると、「Marcia は、自我同一性を職業的・イデオロギー的帰依 (職業・宗教・政治についての commitment) の有無と、危機 (crisis: いくつかの選択肢を前に迷ったり悩んだりした体験) の有無という2つの基準から決定される自我同一性地位として定義している。自我同一性地位は、同一性達成 (identity achievement)、モラトリアム (moratorium) 早期完了 (foreclosure) 同

一性拡散 (identity diffusion) の4つに分類される (P. 16 より)。」としている。なお commitment は、八木 (1988)²⁸⁾ では「傾倒」という訳を用いている。

Offer らの見解にたってみると、Erikson 理論による追求とは違った意味あいが生じてきた。私の女子学生における親子の「似より」という分析方法は、何とかそれなりの地位をこれからの研究テーマである、「自己形成と親子関係」の中に占めていけそうである。

筆者がこれまで4つの論文²⁾⁻⁵⁾において用いた群分けのための抽出作業は、7区分表示の区分③ (三者共通) の自分における項目出現率 (%) をもとにしていた。(この場合分母の個数は56ではなく、「はい」・「いいえ」の項目数である。) しかし、本研究からはさらに簡略化させ、項目数で処理することに踏み切った。こうなると区分③の値は1つで済み、計算も早くな

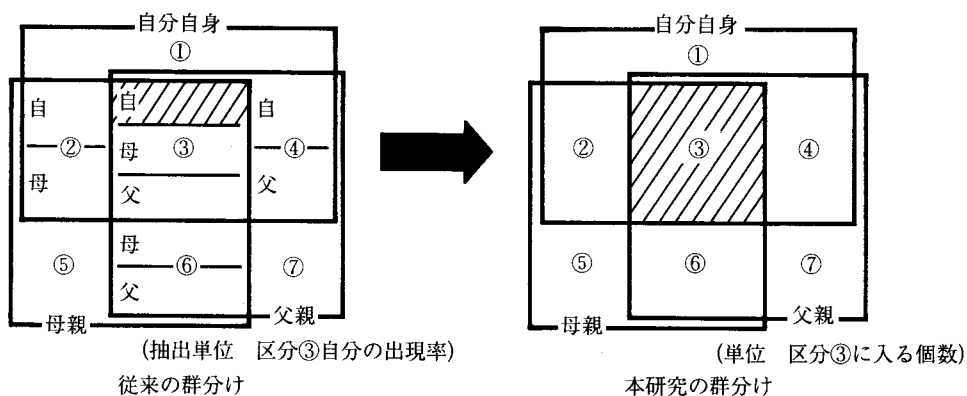


図1 7区分表示法による親子の「似より」の群分け抽出方法の変更

るし、群分けも実に楽になる (図1 参照)。

今回のものは、これまで学会で発表してきたもの⁶⁾⁷⁾を論文化している。だが、これらは認知タイプによるY-Gの分析であったり、分母の違う出現率をもちいたものであった。そこで、新しく採用した群分けの方法でもう一度処理しなおし、まとめ上げたものである。

本研究の目的

1. 親子の「似より」によって分けられた3群は、女子学生の「自分自身」を構成する4つの人格認知次元で前回⁵⁾と同じ相違をみせるか。
2. 親子の「似より」によって分けられた3群は、モーズレイ性格検査 (MPI) とY-G性格検査によって調べられた性格とどのような関係にあるか。
3. 青年期に対する二つの見解と、親子の「似より」による3群との関係を考える。
4. 「自分とは何か」ということについて、これまで学びまとめたことと新しい知見との融合をはかる。

方 法

対象者と実施期日 広島文教女子大学文学部 (国文学科・英文学科・初等教育学科) と短期大学部 (幼児教育学科) の学生1・2年生である。1) モーズレイ性格検査 (MPI) と「自己と父母の性格認知」の調査 1982年12月中旬 278名。2) Y-G性格調査と「自己と父母の性格認知」の調査 1981年12月、1982年6月、1983年11-12月、1984年6月と1985年6-7月のあわ

親子の「似より」と女子学生の性格との関連（秋山）

せて404名が検査・調査に応じてくれた。

実施方法 1982年12月と1983年12月では、調査用紙と検査用紙を封筒に入れて学生達に配布し、各自持ち帰って記入が済んだら提出するように依頼した。その他の調査・検査は、「青年心理学」（文学部）と「児童心理学」・「精神衛生」（短期大学部）の講義時間中に、学生に一斉に配布し、記入後その時間内に提出を求めた。

実施内容 ①「自己と父母の性格認知」の調査について 西平が作成した75の性格項目を、56項目に整理したものを使用。評定の対象は、「自分自身」・「母親（自分の）」・「父親（自分の）」の三者についてである。学生達は、各評定対象ごとに5段階（^a非常に（しばしば）そう思う、^bどちらかといえば（まあ）そう思う、^cふつう・わからない・なんともいえない、^dどちらかといえばそう思わない、^e全く（決して）そう思わない）で評定するように求めた。

秋山・有馬（1985）⁴⁾で、この56項目は4つの人格認知次元（因子）42項目とその他の14項目に分けられている。4因子とその他でまとめた項目の内容は、次の通りである。

F1 内向性（12項目）

しよげやすい
おく病な
感傷的（オセンチ）な
意志の弱い
甘え（た）
ロマンチックな
行動力のある（－）
他人を気にする
指導力のある（－）
スケールの大きな（－）
内気な（はにかみやの）
服従的な

F2 自己顕示性（9項目）

利己的・自己中心的な
支配欲の強い
強がり（の態度をとる）
うぬぼれの強い
わがままな
ひねくれた
頑固な
虚栄心の強い
粗暴な

F3 誠実性（14項目）

礼儀正しい
ねばり強い
几帳面な
ひたむきな
ものを深く考える
包容力のある
正義感の強い
献身的な
親切な
やさしい
なげやりなところのある（－）
無責任な（－）
あきっぱい（－）
調和のとれた

F4 明朗性（7項目）

明るい
ユーモアのある
友人の多い（社交的な）
さっぱりした
冒険好きな
未来に大きな希望をもつ
孤独な（－）

その他（14項目）

（重複負荷）
しっと深い
不安定な
神経質な（線の細い）
疑い深い（不信の）
理想主義的な
ヒステリックな
趣味の広い
（毎日の生活に）生き甲斐を感じずる
素直な
ニヒルな（未来に希望や理想のない）
体の強い（たくましい）
独立心の強い
宗教的な（敬けんな）
古いものの考え方をする

データの処理 「自己と父母の性格認知」の調査で得られた結果は、2種類の変換がなされる。まず、群分けのための7区分表示法の場合には、非常にそう思う・どちらかといえばそう思うを「はい」、どちらかといえばそう思わない・全くそう思わないを「いいえ」とし、ふつう・わからない・なんともいえないを「？」に置きかえ、3段階とし、「はい」と「いいえ」の項目をもとにして処理する。4つの因子別得点をもとにした分析では、非常にそう思うから全くそう思わないまでを5～1の得点に変換する。

②モーズレイ性格調査 (MPI) について

MPI とは、Maudsley Personality Inventory の略である。この検査は、外向性 (Extraversion) —内向性 (Introversion) 尺度：通称 E 尺度と、神経症的傾向 (Neuroticism) 尺度：通称 N 尺度で構成されており、各々の項目数は24ずつである。「はい」「?」「いいえ」の3件法なので、最高得点は48点、最低得点は0点となっている。さらに、虚偽発見尺度 (Lie Scale)：通称 L 尺度が20項目含まれている。これは、自分をよくみせかけようとする傾向の強さを示すものとされている。この得点が20点以上ある場合は、N, E 両尺度の得点を考察するにあたっては、特別の配慮が必要と考えられている。自己防衛の態度の強いひとは L 尺度が高くなる傾向があるようである (日本版モーズレイ性格検査手引 (1975年) 誠信書房より)。

③Y-G 性格検査について この検査で調査される性格特性は12である。各尺度は10項目あり、3件法で配点は2点～0点とされている。この検査の特徴は、プロティール欄に男女別に粗点を記入すると、5段階の標準点が目でわかるように工夫されていることである。各々の標準点に含まれる％は、①6.7％、②24.2％、③38.3％、④24.2％、⑤6.7％にできるだけ近くなるようにしてあるし、標準点の下にはパーセンタイルも記入してあるので、大まかな百分順位もわかるようになっている。

12の性格特性は大きくは、3つの尺度に分かれる。3つの尺度ごとに分けて12の性格特性を説明してみよう。

「情緒安定性」因子

D. 抑うつ性 (depression)

度々ゆううつになる等の陰気な悲観的性質。

C. 回帰性傾向 (cyclic tendency) — 気分の変化 —

気分が変り易い、感情的である等の情緒不安定性の性格を調べるもの。

I. 劣等感 (inferiority feelings)

劣等感になやまされる、自信がない等の性質。

N. 神経質 (nervousness)

神経質、心配性、いらいらする等の性質。

「社会適応性」因子

O. 客観性がないこと (lack of objectivity)

ありそうもないことを空想する、ねつかれない等の空想性と過敏性である。

Co. 協調性のないこと (lack of cooperativeness)

不満の多い、人を信用しない等の不満性と不信性である。

Ag. 愛想の悪いこと又は、攻撃性 (lack of agreeableness or aggressiveness)

気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見を聞いたがらない等の、攻撃的な性格で、これが情緒安定性と結合すれば社会的活動性となり、情緒不安定

な性質と結びついてあらわれるときは、社会的不適応、喧嘩ずき、問題を起しやすい性格となる。この尺度の得点が高いことは良い場合と悪い場合があり、同様に低過ぎる場合にも良い場合と悪い場合がある。

「向性」因子

G. 一般活動性 (general activity)

仕事が速い、動作がきびきびしている等の身体的な活動性と、ほがらかな性質である。

R. のんきさ (rhythymia)

人といっしょにはしゃぐ、いつも何か刺激を求める等の、気がるな、のんきな、衝動的な性質である。

T. 思考的外向 (thinking extraversion)

深く物事を考える傾向がある。度々考えこむくせがある、等によってあらわされる思索的傾向と瞑想的反省傾向の逆方向の性格で、その反対の性格は、思考的内向 (thinking introversion) とよばれる。

A. 支配性 (ascendace)

会やグループのために働く、引込み思案でない等のソーシャルリーダーシップである。

S. 社会的外向 (social extraversion)

人との交際を好む、人と話をするのはすきである等の、社会的接触を好む傾向で、その反対の性格は社会的内向 (social introversion) とよばれる。

(Y-G 性格検査実施手引 竹井機器工業 KK より)

結果と考察

分析1 「自分自身」の4つの人格認知の因子別得点について

本研究においては、親子三者間の「似より」による群分けをする場合、7つの区分に入った項目数、特に、三者共通区分 (③) の「はい」と「いいえ」の出現数をもとに、操作を行う。区分③の中に沢山の項目が入っている者たちは、似より「大」群とし、少ない項目しかみい出せない学生達は、似より「小」群の中に位置づける。なお、その中間に入る約50%位の者たちは、似より「中」群となる。3つの評定対象ごとに「はい」・「いいえ」で選択された項目数が差をみせたとしても、従来とは違って%に変換することもいらず、「？」反応も含めた56項目をベースにできる。この場合も分析の対象になるのは、「はい」・「いいえ」の総和であるが、これが7つの区分に何個ずつ入るかだけを気にすればよい。あまりに選択された項目が少ないということは、「？」反応が多いことを物語っているのである。これで随分とデータ処理が楽になった。

表1-1は、三者共通区分 (③) における3群の出現数の幅と、人数を示したものである。似より「大」群と「小」群は、各々が全体の25%に近づける人数になるようにしてある。表1-2には、7区分 (①～⑦) における平均出現数とSD、あわせて、「はい」+「いいえ」で選

表1-1 3群の三者共通区分にはいった性格項目*1の数と人数

群	三者共通区分 (③) 単位 コ	N	出現%
似より「大」	39-20	72	25.9
似より「中」	19- 9	138	49.6
似より「小」	8- 0	68	24.5
計		278	100.0

*1 「はい」か「いいえ」で選択された項目数

表 1-2 7 区分ごとにみた項目の平均出現数と 3 つの評定対象の平均出現項目数

群	区分	7 区分ごとの出現数 (コ)							「はい」か「いいえ」で 選択された平均項目数		
		①自分 のみ	②母子 共通	③三者 共通	④父子 共通	⑤母親 のみ	⑥父母 共通	⑦父親 のみ	自分自身	母親	父親
似より「大」	M	9.2	6.1	25.6	5.8	5.9	10.3	7.4	46.6	47.9	49.0
	SD	4.7	3.6	4.8	3.5	3.0	4.6	3.7	6.4	5.2	5.2
似より「中」	M	11.8	8.1	13.7	7.1	9.9	10.5	10.6	40.8	42.2	41.9
	SD	4.9	4.4	3.2	4.5	4.6	5.7	4.5	7.5	6.7	7.6
似より「小」	M	15.5	7.8	5.4	6.7	12.8	10.3	12.6	35.6	36.3	35.1
	SD	6.5	4.5	2.3	4.5	5.8	6.6	5.7	7.7	8.7	10.3
全 体	M	12.0	7.5	14.8	6.7	9.6	10.4	10.2	41.0	42.3	42.1
	SD	5.7	4.3	8.0	4.3	5.2	5.7	5.0	8.2	8.0	9.3

択された平均項目数と SD が、3 評定対象ごとに示されている。なお、区分③の三者共通のところに斜線をつけたのは、ここで似よりの群分け作業が行われるからである。自分のみ区分 (①)、母親のみ区分 (⑤) それに父親のみ区分 (⑦) は、三者共通区分 (③) とは逆に、「大」群よりは「中」群、「中」群よりは「小」群となるにつれて出現数が増大している。三者共通区分 (③) に入る項目数が少なくなればなるほど、他の区分の中にちらばっていく。1988年の論文⁵⁾で明らかになっているが、3 つの評定対象に対する「はい」+「いいえ」の選択項目数の平均が「小」群になるほど有意に少なくなっている。このことは、7 区分の中で操作できる個数もさらに小さい値になることを意味している。「はい」か「いいえ」で判断がつかない項目が多くなればなるほど、似よりから遠のいていくことにもなりうることを表している。

親子の「似より」を抽出するために用いている 56 の性格項目は、そのうちの 42 項目が 4 つの人格認知次元を構成している。この 4 つの次元についての検討は、1988 年の論文⁵⁾において詳述したのであるが、今回の群分け方法の簡素化と、「中の上」群・「中の下」群に分けた前回のものをここでは「中」群一つに統一する作業が実施された。再度整理し直し、新しく因子別得点を 3 群と全体で算出したものが表 1-3 である。一要因分散分析の結果、4 つの次元ともに

表 1-3 評定対象「自分自身」の因子別平均得点と SD

群		F1 内向性	F2 自己顕示性	F3 誠実性	F4 明朗性
似より「大」	M	3.02	2.89	3.69	3.95
	SD	0.55	0.63	0.33	0.55
似より「中」	M	3.32	3.10	3.36	3.57
	SD	0.52	0.62	0.31	0.52
似より「小」	M	3.42	3.28	3.17	3.30
	SD	0.49	0.59	0.32	0.57
全体	M	3.27	3.09	3.40	3.60
	SD	0.54	0.63	0.37	0.59

一要因分散分析

F (2, 275)

13.21**

5.96**

35.14**

20.86**

多重比較 (Tukey 法)

P<.05に設定

** P<.01

* P<.05

すべて有意な差が得られた。3群を比較するための多重比較法としては、Tukey 法を採用し、 $P < .05$ に設定して有意差の検定を試みた。F1 内向性と F2 自己顕示性では、「大」群が他の2群と比べて差をみせていることがわかった。「大」群の学生達は、内向的な割合が他の2群よりも低く、自己主張をする程度も低いという結果となった。F3 誠実性と F4 明朗性では、3群間のすべてに差がみられている。「小」群よりも「中」群、「中」群よりも「大」群になるほど、自分は誠実であり、明るい性格であるという受け止め方をしていることがわかる。

以上、似より「大」群と他の2群とは、4つの人格認知次元のすべてにおいて、特異な差をみせたことになる。内気ではなく、自己主張も他と比べてあまりせず、誠実にかつ朗らかに毎日を過ごしている女子学生の存在がここにはある。これに対し、似より「中」群の者達は、F3 と F4 において似より「小」群との間に有意な差をみせた。と言うことは、F1 と F2 に関しては「小」群との間に差がみられなかったわけである。

なお、表1-4 は、評定対象「母親」と「父親」について女子学生が判断した因子別得点の平均と SD である。この度は、資料を載せるのみとし、詳しくは述べないことにしたい。

表1-4 評定対象「母親」と「父親」の因子別平均得点と SD

評定対象		母 親				父 親			
		F1	F2	F3	F4	F1	F2	F3	F4
「大」	M	2.36	2.26	4.00	3.95	2.00	2.54	4.06	3.98
	SD	0.46	0.57	0.43	0.58	0.54	0.61	0.42	0.58
「中」	M	2.66	2.58	3.71	3.65	2.29	2.92	3.72	3.48
	SD	0.48	0.55	0.36	0.48	0.52	0.64	0.33	0.46
「小」	M	2.64	2.68	3.64	3.34	2.44	2.92	3.45	3.29
	SD	0.47	0.61	0.39	0.48	0.60	0.71	0.51	0.64
全体	M	2.58	2.52	3.77	3.65	2.25	2.82	3.74	3.56
	SD	0.49	0.59	0.41	0.55	0.57	0.67	0.46	0.60

分析2 似よりと MPI との関連について

2-1 MPI の得点について

MPI のデータは、1982年12月の調査・検査に基づいているので、分析1の4つの人格認知次元と重ね合わせながら、性格的な特徴をみることができる。表2-1 は、3つの尺度 (E 尺度, N 尺度, L 尺度) の平均と SD を示したものである。一要因分散分析では、3つの尺度ともに有意な差が得られている。個々の間の比較は、分析1と同じく、危険率 (有意水準) を0.05に設定した Tukey 法をもとに多重比較を行った。N 尺度においては、3群間のすべてに有意な差がみられた。似より「小」群よりも「中」群の方が、「中」群よりも「大」群の

表2-1 MPI の3尺度の平均得点と SD
(単位 点)

似より群		E 尺度	N 尺度	L 尺度
「大」	M	36.1	18.5	13.7
	SD	9.6	10.2	6.0
「中」	M	31.3	22.9	10.5
	SD	10.0	10.3	5.2
「小」	M	29.6	27.5	10.5
	SD	10.3	9.9	5.0
全体	M	32.1	22.9	11.3
	SD	10.3	10.6	5.6
F (2, 275)		8.42**	13.75**	9.44**

方が、神経症的傾向が有意に低くなっている。E 尺度と L 尺度では、似より「大」群と他の 2 群の間にのみ差が認められた。「大」群は「中」・「小」群に比べれば、より外向的であることがわかる。L 尺度においては、「大」群が自分をよくみせようとする傾向において、他の 2 群よりも有意に強かったといえよう。

寺崎 (1985)²⁴⁾ は、MPI の逐年変化を調べている。E 得点は年々上昇していく傾向を示し、近年外向的傾向が強まってきている。これに対し、N 得点の方は近年減少してきていると述べている。本研究結果でもこのことがいえそうである。なお、L 得点については一定方向への変化はほとんどみられていないようである。

2-2 MPI と評定対象「自分自身」の 4 つの因子別得点との相関について

ここでは、ピアソンの相関係数 (γ) をもとに、42 項目で構成されている自分に対する 4 つの人格認知次元の因子別得点と、MPI の E 尺度、N 尺度との関係を 3 群と調査全体で調べてみた。

その 1 評定対象「自分自身」について 4 つの人格認知因子間の関連をピアソンの γ でみたのが表 2-2 である。全体をみた場合には、F1 内向性と F4 明朗性との間に高いマイナスの相関が得られた。3 群ごとに比較した場合では、「大」群と「中」群には F1 と F4 に、全体的場合と同じく、高いマイナスの相関があることがわかる。特に「大」群では著しいマイナスの相関である。「内向性」の得点が低くなるほど、「明朗性」得点の方は逆に高くなっていくことを示している。「小」群では、F1 と F3 誠実性との間にマイナスの高い γ が出ている。「大」群では、逆にプラスの方向で γ の値が得られているが、それほど高いものではない。内向性得点が高くなれば誠実性得点が低くなる傾向が、「小」群にだけどういうわけか出てくるのはわからない。これ以外に 0.40 以上の相関は得られなかった。

表 2-2 因子別得点間のピアソンの相関 (r)

因子 似より群	F1 内向性			F2 自己顕示性		F3 誠実性
	F2	F3	F4	F3	F4	F4 明朗性
「大」	0.16	0.33	-0.82	0.15	0.05	-0.15
「中」	0.30	0.06	-0.68	0.03	0.13	0.34
「小」	0.27	-0.51	-0.35	-0.26	-0.34	0.20
全 体	0.30	-0.14	-0.66	-0.15	-0.06	0.34

表 2-3 E 得点と N 得点の γ

MPI
E vs N
-0.09
-0.36
-0.15
-0.29

その 2 MPI における E 尺度と N 尺度との相関は、3 群と全体のすべてにおいて低い相関値しか得られていない。どちらかといえば、似より「中」群で、少しマイナスの関連が認められる程度である。全体的にみて、高い相関は得られず、E 得点と N 得点は別々の次元であることの裏付けとなった (表 2-3)。

その 3 F1 内向性と MPI の E 尺度との間には 3 群と全体のすべてにおいてマイナスの高い相関値が得られている。F1 は、外向的でないもの、つまり、MPI での内向を測定していることがわかる。ここで F1 内向性の妥当性が確かめられたともいえる (表 2-4)。N 尺度との関係では、似より「小」群を除いた 3 つの比較において、プラスの高い相関値が出た。F1 の得点が高くなるほど、神経症的傾向の得点も高くなることが示されている (表 2-4 以下同じ)。しかし、なぜか「小」群の場合には、そのようにいえない位の低い相関値となった。

F2 自己顕示性と MPI の関連では、N 尺度において全体と「中」群にやや高い相関がみられ

親子の「似より」と女子学生の性格との関連（秋山）

表 2-4 4つの人格認知次元と MPI の2尺度とのピアソンの γ

人格認知次元 MPI	F1 内向性		F2 自己顕示性		F3 誠実性		F4 明朗性	
	E	N	E	N	E	N	E	N
「大」	-0.63	0.59	0.14	0.38	-0.08	-0.11	0.76	-0.16
「中」	-0.57	0.53	-0.01	0.46	0.00	-0.11	0.66	-0.36
「小」	-0.40	0.29	0.00	0.23	0.16	0.02	0.77	-0.17
全 体	-0.58	0.51	-0.02	0.42	0.12	-0.20	0.72	-0.35

る。調査全体または「中」群からみると、神経症的傾向の得点は F2 の得点とプラスの関係になるのだが、「大」群と「小」群では関連性の度合は低くなっている。F3 誠実性については、MRI の2尺度との間に相関が認められなかった。F4 明朗性については、MRI の E 尺度との間に非常に高い相関が3群と全体のすべてにおいて得られた。明朗性得点が高くなれば、E 尺度得点（つまり外向性）も高くなることを示している。

以上の結果をまとめてみると、F1 内向性は MPI の E 尺度とマイナスの高い相関をみせ、F4 明朗性は同じ E 尺度と非常に高いプラスの相関をみせたことになる。その1で確かめられた F1 と F4 の逆関係が MPI の E 尺度を介しても再確認されたことになっている。

2-3 MPI の E 尺度と N 尺度の組合せからみた似より3群の出現傾向について

E 尺度、N 尺度ともに平均と $\pm 1SD$ をもちいて4つの区分に分ける（+1SD 以上、+1SD 未満～平均、平均未満から -1SD 未満、-1SD 以下）。2つの尺度を組み合わせると、16の区分が設定できる。この区分の中に似よりの3群がどのように位置づけられるかを出現率でみた

表 2-5 MPI の E 得点と N 得点の組み合わせでできた16区分内の3群の出現率（単位 %）

E	N	①48~34		②33~23		③22~13		④12~0		E 尺度全体	
		大	中	大	中	大	中	大	中	大	中
① 43~48	大	2.8		6.9		6.9		12.5		⊕ 29.2	
	中	0.0		4.4		4.4		2.9		⊕ 11.6	
	小	4.4		4.4		5.9		0.0		⊕ 14.7	72.3
② 33~42	大	4.2		12.5		15.3		11.1		⊕ 43.1	
	中	3.6		7.3		17.4		6.5		⊕ 34.8	39.7
	小	7.4		7.4		7.4		2.9		⊕ 25.0	
③ 22~32	大	0.0		2.8		8.3		8.3		⊕ 19.4	
	中	9.4		13.0		8.0		5.1		⊕ 35.5	27.7
	小	13.2		13.2		7.4		4.4		⊕ 38.2	
④ 0~21	大	2.8		2.8		1.4		1.4		⊕ 8.3	
	中	4.4		8.7		2.2		2.9		⊕ 18.1	60.3
	小	8.8		10.3		2.9		0.0		⊕ 22.1	
N 尺度全体	大	9.7		25.0		31.9		33.3			
	中	17.4		33.3		31.9		17.4			
	小	33.8		35.3		23.5		7.4			

ものが表2-5である。まず、尺度ごとにみても、E尺度全体では「大」群の72.3%が①+②(33~48点)に入っている。つまり、「大」群では外向的な者が多いのである。これに対し、「小」群では③+④(0~32点)の方に60.3%のものが位置づけられた。「中」群では②+③(22~42点)の間に70.3%が収まっている。N尺度全体では、「大」群は③+④(0~22点)に65.2%が、反対に「小」群では69.1%が①+②(23~48点)に入っている。「中」群は②+③(13~33点)という中間に65.2%が収まっている。

全体を通してまとめてみると、「大」群では外向的で神経症的傾向は低く、逆に「小」群においては内向的で神経症的傾向が高い者が多いといえる。「中」群ではE尺度、N尺度とも中間の普通に入るものの数が多かったといえると思う。

分析3 似よりとY-G性格検査との関連について

5年間にわたって、404人のデータが収集された。分析3でも群分けは、三者共通区分(③)の出現数で実施された(表3-1)。

「大」・「小」群ともに大体25%の抽出に心掛けたために、分析1の場合とは少し違った値となっている。「大」群では2コ減って18までがこの群に入り、「小」群でも1コ減って7-0コの範囲のものとなっている。

3つの評定対象に対する「はい」と「いいえ」の平均項目数は、これも分析1とは若干相違があり、全体的に少し低くなっている。しかし、「大」群から「小」群になるに従って平均出現数が少なくなっているのは分析1と同じであった(表3-2より)。

表3-1 区分③にはいった「はい」と「いいえ」で選択された性格項目の数と人数

似より群	三者共通区分(③)	N	出現%
「大」	44-18	98	24.3
「中」	17- 8	204	50.5
「小」	7- 0	102	25.2
計		404	100.0

表3-2 7区分ごとにみた項目の平均出現数と3つの評定対象の平均出現項目数(単位 コ)

似より群	区分	7区分ごとの出現数							「はい」・「いいえ」で 選択された平均項目数		
		①自分のみ	②母子共通	③三者共通	④父子共通	⑤母親のみ	⑥父母共通	⑦父親のみ	自分自身	母親	父親
「大」	M	9.4	6.0	24.2	6.1	7.1	9.2	7.6	45.5	46.5	47.0
	SD	4.4	3.7	5.8	3.7	3.9	4.9	3.7	6.1	5.9	6.4
「中」	M	12.5	7.5	11.9	6.5	10.2	10.6	11.1	38.4	40.2	40.1
	SD	4.6	4.3	2.6	4.4	4.8	5.8	5.0	6.6	6.9	7.3
「小」	M	15.0	7.4	4.6	7.1	13.9	8.0	11.9	34.0	33.9	31.6
	SD	5.3	4.8	2.0	4.3	6.2	5.4	5.8	7.4	9.1	9.9
全 体	M	12.4	7.1	13.0	6.6	10.4	9.6	10.5	39.0	40.1	39.7
	SD	5.1	4.3	7.9	4.2	5.5	5.6	5.2	7.8	8.5	9.6

3-1 (Y-G) 3つの因子と12の性格特性の得点について

12の性格特性は大きくは、3つの因子に分かれるとされている。そこで、この3つの因子ごとに性格特性を分けて、3群がどのような相違をみせるかを確かめてみよう。

その1 「情緒安定性」因子

この因子は4つの性格特性で構成されている。4つの尺度とも得点が増すほど、その特徴が

大となる (最低0～最大20点)。4つの尺度をあわせた「情緒安定性」因子の得点は0～80点となる。得点が高くなるほど情緒は不安定になっていく。岸本 (1982)¹⁰⁾によると、これらの4つの尺度はMPIのN尺度と深い関係にあることが示されている。

表3-3は、4つの尺度ごとの3群と全体における平均得点とSDを示している。一要因分散分析では、すべてにおいて有意な差が認められた。多重比較により、3群間の相互関係をみたが、似より「大」群が他の2群に比べて得点が低いという結果になっている。「中」群と「小」群の間には差は認められていない。情緒的に安定している者が、似より「大」群に多いということがわかる。「大」群のみのクローズアップ化といえよう。これは、分析2でみたMPIのN尺度における結果を裏付けている。ただ、Y-Gの方が4つの性格特性尺度に分けて検討ができるので、より詳しい内容分析を試みる事ができたといえよう。

表3-3 Y-G 性格検査の情緒安定性因子と4尺度における平均得点とSD (単位 点)

因子・尺度 似より群		情 緒 安 定 性				情緒安定性
		D	C	I	N	
「大」	M	8.4	9.7	7.1	8.6	34.4
	SD	5.5	4.7	5.2	5.0	17.1
「中」	M	10.6	11.1	10.7	9.9	42.3
	SD	5.4	4.7	4.6	4.7	15.7
「小」	M	11.5	11.8	11.6	10.5	45.5
	SD	5.3	4.2	4.8	4.6	15.4
全 体	M	10.3	10.9	10.2	9.7	41.2
	SD	5.5	4.7	5.0	4.8	16.5
F (2, 401)		9.03**	5.11**	19.13**	4.49*	13.36**

その2 「社会適応性」因子

O, Co, Ag という3つの尺度で構成されているものである。表3-4は、3つの尺度ごとの平均得点とSDそれに社会適応性因子の平均得点とSDが記してある。「社会適応性」因子の得点は0～60点である。得点が高くなるほど不適応をおこしていることになる。一要因分散分析

表3-4 Y-G の社会適応性因子と3尺度における平均得点とSD (単位 点)

因子・尺度 似より群		社会適応性			社会適応性
		O	Co	Ag	
「大」	M	7.7	5.0	11.1	23.6
	SD	3.9	3.4	4.0	8.6
「中」	M	8.9	7.2	10.6	26.7
	SD	3.9	3.9	3.9	8.1
「小」	M	9.4	7.7	11.2	28.3
	SD	3.6	3.7	3.6	7.6
全体	M	8.8	6.8	10.9	26.4
	SD	3.9	3.9	3.8	8.2
F (2, 401)		5.53**	16.01**	1.02 ^{ns}	8.81**

では O と Co において有意な差がでたが、Ag には有意な差がなかった。Tukey 法によると、O と Co については、やはり似より「大」群が他の 2 群に対して差をみせたことがわかる。他の群に比べ、客観性と協調性が「大」群の者にはあるようだ。

社会的適応因子でみた場合にも差がでたが、この場合には 3 群の相互間すべてに有意な差が認められた。「大」群よりは「中」群、「中」群よりは「小」群となるにつれて、社会不適応への度合が高くなっているが、最高点が 60 点であるということを考慮した場合、それほど大きな不適応を「小」群の者達がみせているとはいえないかもしれない。

その 3 「向性」因子

G, R, T, A, S という 5 つの尺度から成り立っている。表 3-5 をみると、一要因分散分析の結果、G, A, S の 3 つの尺度において有意な差が得られた。多重比較では、G において 3 群間相互に差が認められ、A と S では似より「大」群と他の 2 群の間で差をみせた。

表 3-5 Y-G の向性因子と 5 尺度における平均得点と SD (単位 点)

因子・尺度		向 性					向 性
似より群		G	R	T	A	S	
「大」	M	14.0	13.5	10.4	12.9	15.8	66.8
	SD	4.2 *	3.5	4.9	4.7 *	3.5 *	14.1 *
「中」	M	10.6	12.5	10.3	9.6	13.4	56.3
	SD	4.0 *	4.3	4.6	4.6	4.0	14.6
「小」	M	9.5	12.4	9.6	8.9	12.7	53.1
	SD	4.3	4.4	4.4	4.9	4.6	16.4
全 体	M	11.2	12.7	10.1	10.2	13.8	58.0
	SD	4.4	4.2	4.6	5.0	4.2	15.8
F (2, 401)		37.49**	2.52 ^{ns}	0.86 ^{ns}	22.12**	20.15**	23.52**

岸本 (1982)¹⁰⁾によると、G, R, A, S 尺度が MPI の E 尺度と強い関係をもっているようである。一般活動性 (G) は、「小」群よりも「中」群、「中」群よりも「大」群になるに従って得点は高くなる。支配性 (A)、社会的外向性 (S) では「大」群のみが高得点をみせたといえる。「向性」因子は 0～100 点の得点となるが、全体的にやや高めの平均得点となっている。ここでもやはり「大」群の高得点が目につく。MPI の E 尺度でみせた有意な差は、Y-G では G, A, S によって裏付けられたといってもよさそう。

Y-G 検査の全体 (12 尺度) を通していえることは、MPI の場合とほぼ同様、似より「大」群の浮き上がりであった。なぜこの群の者達には他の群の女子青年達に比べて、このように明るく社交的なものが多いのだろうか。

さて、「向性」因子はさらに 4 つの因子にも分けることができるとされている。活動性 (Ag, G)、衝動性 (G, R)、内省性 (R, T)、主導性 (A, S) と名づけられているものがそれである。しかし、この度はここまで細かく分析することはひかえ、「向性」因子として一括して処置するに留めた。

3-2 (Y-G) プロフィールの類型をもとにした分析

Y-G 性格検査は、プロフィールをもとにして類型を判定することができる。12 のプロフィールをもちい、大きくわけて 5 つのどの区分に入っているかを調べることによって、5 つ

親子の「似より」と女子学生の性格との関連 (秋山)

Y-G 性格検査プロフィール

—女性の得点のみ—

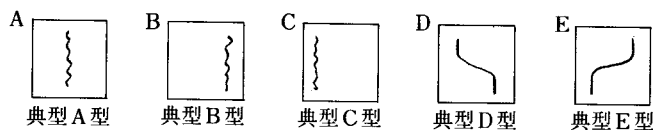
標準点		1			2			3			4			5		
パーセンタイル		1	5	10	20	30	40	50	60	70	80	90	95	99		
D		0	1	2	3	4	10			16	17	18	19	20	D	
C		0	1	2	3		8			14	18			19	20	C
I			0	1	2	6		13			18			19	20	I
N		0	1	2	3	8		13			18			20		N
O		0	1	2	3	6		11			15			20		O
Co			0	1	2	3	4	5		9	14			20		Co
Ag	0	1			4	5	9			13	17			20		Ag
G		0	1	2	3		8			14	19			20		G
R		0			12	3	7			12	17			20		R
T		0			1	2	6			11	16			20		T
A			0	1	2		5			12	18			19	20	A
S		0	1	2	3		8			14	19			20		S

	1	2	3	4	5	
Co	(左上半)		(中)	(右上半)		Co
Ag	(左下半)		央 ()	(右下半)		Ag

E 系統値	C 系統値	A 系統値	B 系統値	D 系統値
-------	-------	-------	-------	-------

Y-G 性格検査プロフィールの類型

タイプ	尺度	情緒安定性 D C I N	社会適応性 O Co Ag	向 性 G R T A S
(A) 平均型		平 均	平 均	平 均
(B) 右寄り型		不安定	不適応	外 向
(C) 左寄り型		安 定	適 応	内 向
(D) 右下がり型		安 定	適応又は平均	外 向
(E) 左下がり型		不安定	不適応又は平均	内 向



Y-G 性格検査実施手引 (p. 11~12) より

図2 類型の判定

の系統の個数を割り出していく。A系統には3の中におさまった個数を記入し、B系統では右半分に入ったもの、C系統は左半分に入ったもの、D系統は左上半と右下半におさまった個数を数える。そしてE系統は右上半と左下半に入った個数を記入していく。A+B+C=12、E+

表 3-6 5つの系統の中におさまった尺度の個数と SD
(単位 コ)

系統		E	C	A	B	D
似より群						
「大」	M	1.8	3.1	4.1	4.7	6.0
	SD	2.0	2.1	2.0	2.1	2.7
「中」	M	3.0	2.6	4.9	4.5	4.1
	SD	2.4	1.8	1.9	2.3	2.4
「小」	M	3.6	2.5	4.9	4.7	3.6
	SD	2.6	1.8	1.8	2.1	2.6
全 体	M	2.9	2.7	4.7	4.6	4.4
	SD	2.4	1.9	2.0	2.2	2.7

表 3-7 (Y-G) 典型、準型、混合型の出現人数の比率 (単位 人数の%)

群	型	A	A'	A"	B	B'	AB	C	C'	AC	D	D'	AD	E	E'	AE
似より 「大」		2.0			10.2			2.0			19.4			0.0		
			4.1			12.2			0.0			28.6			3.1	
				2.0			5.1			4.1			6.1			1.0
		[8.2]			[27.6]			[6.1]			[54.1]			[4.1]		
似より 「中」		3.9			7.8			1.5			4.4			1.0		
			5.9			14.2			3.4			16.2			8.3	
				13.2			9.8			3.4			5.4			1.5
		[23.0]			[31.9]			[8.3]			[26.0]			[10.8]		
似より 「小」		0.0			6.9			1.0			3.9			4.9		
			6.9			16.7			2.9			13.7			6.9	
				11.8			10.8			2.9			2.9			7.8
		[18.6]			[34.3]			[6.9]			[20.6]			[19.6]		
全 体		2.5			8.2			1.5			7.9			1.7		
			5.7			14.4			2.5			18.6			6.7	
				10.2			8.9			3.5			5.0			3.0
		[18.3]			[31.4]			[7.4]			[31.4]			[11.4]		

A+D=12 となる。これをもとにして、典型・準型・混合型のいずれかが判定されるのである。

3群と全体では、5つの系統の中にだいたい平均何個位の性格特性（以下尺度）が入っているのだろうか。表 3-6 は、5つの系統ごとに示された尺度の個数の平均と SD を表している。「大」群では E 系統に入る尺度数が少なく、「小」群では多い。逆に、D 系統は、「大」群の方が多く、「小」群は全体からみても尺度数が少ないことがわかる。

5つの典型、5つの準型、5つの混合型の出現状況を、3群と全体で示したのが表 3-7 である。D 類 (D D' AD) では、出現人数に大きな差がみられる。「大」群ではこの D 類だけで過半数を占めている。この典型 D は、安定適応積極型と呼ばれている。このタイプの者は、情緒的にも安定し、社会的適応もよく、活動的で対人関係もうまくいっていると見なされている。E 類 (E E' AE) では、類型全体の出現率から比べてみても、この類に入るものは多くはないのだが、重要な意味を内包している類である。「小」群が「中」群より、「中」群は「大」群よ

り、この類の出現率が多くなっていることがわかる。この典型Eは、不安定不適応消極型という。「小」群においてさえ20%弱の出現率ではあるが、これは「中」群の10.8%や、「大」群の4.1%と比較した場合無視しえない値となる。情緒不安定で社会的には不適応気味、そして非活動的となれば、内向的で神経症的傾向の強い人と見なされる可能性の高いものが、この似より「小」群の中に存在するといえるかもしれないのである。

その他群間に差をみせるものとしては、A類(A A' A'')がある。この類では「中」群が23.0%と高い出現数をみせている。逆に、「大」群は8.2%とこのA類の出現も少ない。一方、B類(B B' AB)とC類(C C' AC)は3群ともに差はない。しかし、B類型(不安定不適応だが積極的)のものは、30%前後と出現率が高いのに比べ、C類型(安定消極型)は3群共に出現は低い(6~8%)という結果となった。

女子青年における似より「大」群の特異性は、序文で取り上げた二つの見解のうち、「青年期平穩説」の要素を多分に含んでいるような気がする。これに対し、似より「小」群の内部的多様性(いろいろなタイプの学生達がこの群の中に詰め込まれているのではないかということ)には、「青年期危機説」の立場を支持する存在者がかなり含まれているように思える。

この二つの見解の中に、これから先の研究を位置づけながら、表面的な研究動向に惑わされず、「自分とは一体何か」という大きなテーマの中で“自己形成と親子関係”の関連性を追求していきたい。これからは、できるだけ生涯発達または人生周期の枠ぐみの中で生き生きとした研究を続けたい。筆者の研究モットーである、「全体の中で個を生かす」・「全体の中の個を生かす」という態度をとりつつ、感性和理性を働かせながら、この一連の研究が醸成されていくことを期待したい。今後20年間の研究生活の道は、今ここにその形を現した。このことに対し、まずは^{あんじん}一安心といきたい。

「自分とは一体何か」を考えてみると、この論文の中から浮かんでくる言葉(用語)は、「自我同一性 ego-identity」とか「同一視 identification」といった概念であろう。特に、後者の同一視は「同一化」という用語におきかえて使われることも多い¹⁸⁾。ここでは、そういった概念とは違った新しい〈自分=私〉の考え方を紹介し、それがこの研究と深い関連をもっていたということを述べてみる。私(筆者)の中に新しい自己の道を切り開かせたものなのである。

西平(1986)¹⁵⁾は、H. ワロンの〈内なる他者(l'autre intime)〉という言葉に注目し、この〈内なる他者〉と、〈私(Moi)〉との関連に焦点を絞りながら、〈私〉を〈関係〉において、プロセスとして理解してゆこうとしている。彼が追求し、辿りついた考え方を箇条書的にまとめ上げてみた(P. 203-204)。

1. 〈私〉は実体ではない。〈私〉は他者なしには存在しない。
2. 〈私〉は、他者とのあいだの對他者関係と、〈私〉それ自身の内にある内なる関係という、二つの関係において成り立っていた。
3. その〈内なる関係〉は、実体と実体との関係ではなく、〈内にズレを含んで対をなしている〉という〈私〉の在り方として理解し、さらに、そのズレを全く非対称的で不平等な関係として〈私〉の方にのみ内在すると理解することによって、〈私それ自身が関係である〉と言い換えてきた。
4. 〈私それ自身が関係である〉と言い換えて来たのは、〈私〉を〈関係〉においてと同時
に〈プロセスとして〉理解するためだったのである。

5. <私>がプロセスであるとは、<私>が静止的・固定的な自己同一的な実体ではないということ、むしろ、常に今の自分を乗り越えようとしつづけている、ということである。言い換えれば、<私>は来るべき<私>を投企しつづけるのであり、常に可能性として存在しているということである。
6. <私>がこのように可能性で在り続けるためには、<私>はどのような在り方をすべきなのか。それは、<私>が、自分自身とすき間なく重なり合うという仕方ではなくて、<私>それ自身の中にすき間があり、ズレがあるのでなくてはならないはずである。
7. 重要なことは、乗り越えてゆく<私>のみが唯一本物の<私>なのではないという点である。そうではなくて、あくまでこの両方のズレを含んだ<私>が唯一の<私>なのであり、その関係そのものが<私>なのである。
8. 今までの<私>を不断に乗り越えてゆくプロセスは、同時に、新しいズレ、即ち新しい差異を不断に<私>の内に産みだしてゆく差異化 (differentiation) のプロセスでもなければならぬ。
9. <私>とは、徹底して差異を含んだ関係であって、自ら差異を産みだしつつ、しかも不断にそれを乗り越えようと新しい<私>を投企し続けるようなプロセスの総体として理解されるべきものである。
10. <私>の存在構造を、<私は実体である>という理解と対比的に、<私それ自身が関係である>と表現したい。
11. <私それ自身が関係である>という<私>の在り方を基礎とすることによって、はじめて<私>は、<関係において>と同時に<プロセスとして>理解されうるのである。
12. <私>を<関係において、プロセスとして>理解することによって、<自己完結的、自己同一的な実体>という<私>理解から解放されることの方こそが重要だったのである。
13. <私>とは、他者をすべて排除したあとに残る自己完結的な実体なのではなく、まさにそれ自身<内なる他者>との関係である。
14. 同時に、また<私>とは、恒常的な実体、もしくは持続的な状態として自己同一的な在り方をした実体なのではなく、まさに<私>の内に不断に差異を産み出しつづけ、またそれを乗り越えようと新しい<私>を投企しつづけるプロセスなのである。
15. ワロンの<内なる他者>を手掛りにすることによって、<私は実体である>という理解に対するアンチテーゼを、<私はそれ自身が関係である>という形で定式化されたのである。

現在発表されている人格研究について、もう一度基本に戻るべきだと主張している人がいる。大野 (1991)¹⁷⁾ は、人格研究の動向と課題というテーマで、最近の研究の流れと問題を指摘している。そこで、本研究にとっても大切と思われる箇所を取り出してみた。

- 1) 人格研究が人間の人格という一般性を持ちながら、その一方で非常に個別的なテーマを扱い、これを理解しようとする問題意識が出発点にあるということを、もう一度研究者は考えてみるべきではないか (P. 73 より)。
- 2) 従来実証性に乏しいといわれている質的なデータをどのように分析し、次元的な研究の補足的な資料という位置づけを越えて、そこから得られた知見を、次元的な研究から得られた知見とどのように対応づけていくのか、また、個が埋もれがちな次元的研究にどこまで個別データが生かせるかという方法論の問題は、依然として未解決のままである (P. 73 より)。

ネズミを被験体として、avoidance の消去プロセスを研究していた1966年から1972年の頃、筆者が感じとっていた“群という平均的なデータの中に、どのようにして個体差の問題を取り込むべきか”という追求態度と同じことがここには記されてある。

- 3) 人格研究にもライフスパン、ライフサイクルといった人生全体を見通す視点の導入が考えられる。こうした考え方は、すでに発達研究で重要な切り込み方になっているが、「なぜ、こうした人格形成がなされたのか」、また、「こういう人格の人間がどう考え行動し、人生という単位で生きていくのか」という因果関係を明らかにしようとする問題意識にまで発展させた場合、縦断的研究などの方法による事系列のデータ収集が必要になってくる (P. 73 より)。
- 4) 尺度構成の際に構成概念、妥当性、内容的妥当性、併存的妥当性の吟味が不可欠であるが、特に、測定しようとしている内容に関する理論的な考察の行われた研究書に立ち戻る必要がある (P. 73-74 より)。

女子青年の「自己形成と親子関係」の研究に着手して21年目。何とか手にした操作的な親子の「似より」という概念は、長い年月をかけたわりには、シンプルすぎて、応用範囲の狭いものではないかという危惧もある。しかし、自分なりの一つの「物指し」を手に入れたということと、8年間にわたるネズミ達と私との関係において、内なる他者と化し、私の心の中のネズミとして、絶えず私に問いかけ続けてきたものが、人間の人格形成研究に役立つものでありうるとのこと。この二条の光が、これから先の研究を守り育てあげてくれることを信じようと思う。

西平直喜が自我同一性の測定用に作成した75項目に触れた1972年は、E. H. Erikson の life-cycle 理論との出会いであり、G. Freud の「同一視」との再会であった。1980年の論文²⁾で紹介した、内山興正 (1966 P. 166)²⁵⁾ の「ナマに生命体験する自己」と「ナマに生命体験される世界」そして「それぐるみの自己」という考え方。1981年の論文³⁾で取り上げた、西平 (1981)¹⁴⁾ の性格特性と人生への身のこなし方についての考え方。1985年の論文⁴⁾で導入できた Van・den・Berg (1982)²⁶⁾ の「みる」という現象学の中に記されていた「人間の生は変化し続けるのだ」と「人間はひとりひとり違うのだ」という二つの意味。さらに、1988年の論文⁵⁾においては、横山紘一 (1987)²⁹⁾ の十牛図の世界の騎牛帰家の章に書かれていた「自分のなかにある他者」「他者の内にある自分」という受け止め方と、鯨岡 峻 (1986)¹¹⁾ の“「発達する」ということは、すなわち子どもの生活世界の再編・再体制化過程である。”という考え方を取り上げることができた。この子どもの生活世界は、①個体機能次元、②子どもと大人の関係論的次元、③社会文化状況論的次元という三つの複合的次元で構成されているとみなし、相互に貫入しあい、融合することによって生きたものとなると主張されている。この1988年の論文では、3人目として、Martin Buber の「われとなんじ (Ich und Du)」という哲学的発見を組み込んだ。私の研究に対するこれら一連の考え方の水脈が、鈴木鎮一 (94歳) という偉大なる存在者との出会いを媒体として、先生が体得された「人は環境の子なり」のことにばに直に触れることによって、一つの水源にたどりついた。それは、西平 直 (1986)¹⁵⁾ の「＜私＞のとなえ方」である。

また、大野 (1991)¹⁷⁾ が提唱している人格研究の取り組み姿勢が、約25年前にネズミ達との共同生活の中から考えついた、私なりの研究姿勢と見事に一致していたということの驚きと喜びである。この思いは、人生の師として尊敬している鈴木氏との邂逅なくしては、私の心の中

で決して結実しなかったのではないだろうか。心の「出会い」がテーマである青年心理学の講義は、私の宝物である。毎年出会う新しい学生達との新鮮な「共育」の関係は、この授業の中で調査させてもらいながらの20年間でもあり、私の女子青年における自己と父母の性格の「似より」という研究を育ててきた大切な土壌でもあるのである。何とも有難いことである。

さて、最後に一言。これまでの苦心惨憺たる20年間をこの一つの論文に書き込んでみた。この新しい論文が、これから先20年間（と自分では覚悟している）の新しい研究の出発点となり、視界を広げるものとなるように祈り始めている。これまで曖昧模糊としていた考えは、実は一つの水脈のように結びついたものだったのだと思いいたる今、深い感謝の気持ちが沸き起こる。まさに、私は生かされているのである。

謝 辞

1992年10月4日（日）AM 10:40-11:40アポイントなしの突然の訪問にもかかわらず、長野県松本市にある才能教育会館で、鈴木鎮一先生にお会いできるという、夢のような機会が与えられた。集団レッスンの見学をさせていただき、お話も聞かしていただくという貴重な一時間を共に過ごさせてもらえたのである。94歳になられる先生の一日は、「午前2時半起床。3時に仕事開始。原稿を執筆されたり、子どもたちの演奏テープを聴いて講評を書く。軽い朝食をすませ、9時には研究会の本部へ出かけ、夕方までレッスンを指導。午後8時に就寝。」この生活パターンが40年間ずっと続いておられるという【毎日新聞“リフレッシュくらぶ「自然にまかせる」1992.2.4.朝刊より】。

音楽家なら世界中の人が知っているといってもより高名な先生の活躍は、1898年の誕生からスタートしたといってもよいが、17歳の時ヴァイオリンを始められ、23歳で渡独し、8年間音楽とは何かを体で学びとられて帰国。「芸術の実体は、もっとも日常的なわたし自身にあったのです。…(略)…あとはただ自分でやればよかった。より高く、自分をみがきなおす。——それでよいからです（「愛に生きる」²⁰ P. 106より）。」1931年（昭和6年、先生が33.4歳）の頃、当時4歳の江藤俊哉君のヴァイオリンの指導を頼まれた。さて、4歳の子をどう育てればいいのか悩みあげた末、「アッ！日本じゅうの子どもが日本語をしゃべっている！」という平凡だが、ものすごい人間のもつ偉大な能力に感動されたのである。ここから、「どんな子も育つ、育て方ひとつ」がスタートし、以来60年間、彼独特のヴァイオリンによる才能教育、いや、人間を育てるという教育が延々と続いているのである。何という尊い日々の実践だろう。まさに、私が22歳（1966年）の時出会った一冊の講話録「禪談」¹⁹。生涯一雲水として修行し通した故澤木興道老師（1880-1965）の“只管打坐”・“生活即禪”の世界そのものである。

「人間は環境の子である。どの子も育つものであり、それは育て方ひとつにかかっている。だれでも自分を育てることができ、そしてそれは正しい努力ひとつにかかっている（「愛に生きる」²⁰ P. 79より）。この本は1966年に発行されたものであるが、先生との出会いの後、再び精読していた時、目の中に飛び込んできたこの言葉。これは、先生からいただいた色紙と短冊に自書されている「人は環境の子なり」の水源だったのである。助手の渡辺さんと先生に握手をしていただき、心残りではあったが、貴重な時間を私のために30分もさいていただいたことへの感謝の心を先生のお部屋に残した。退室そして退館、満ち足りた気持ちに包まれた1日であった。今もその心は生き生きと脈うっている。

私と鈴木先生との本の出会いは、本学に赴任した1972年に始まる。手にした本は、「才能開発は0歳から」（1969）²¹と「才能開発の実際」（1971）²²であった。幼児教育学科の学生に児

童心理学の講義をするために入手したものである。当時、附属幼稚園で私達は週1回の勉強会を催していた。一人ひとりが自分の選んだ本を紹介しあうのである。私は鈴木鎮一先生になりきって、この二冊の本を紹介した。その折の反応は、どちらかというと、知育重視のように受け取られ、否定的であった。しかし、5年後、土屋孝子主任が、鈴木氏の考え方に好意をよせられるようになったのである。「愛に生きる」(1966)²⁰⁾は、1978年第1回目の精読後、ずっと児童心理学(1992年度より発達心理学Ⅰ)の講義の大切な柱となってきた。そして今回の3回目の精読である。

この出会いと同じ位の重みをもつ出会いが1972年には他にもあったのである。それは当時70歳になられたばかりの武田ミキ学長、同70歳で、以来18年間のおつきあいができた、美術担当教授光岡始先生(1989没88歳)のお二人である。私の人生は急に豊かなものとなっていく。出会いの素晴らしさ・重みが、今日の私を支え、西平 直の「＜私＞をどう理解するか」¹⁵⁾が、私の研究の中に芽吹いた。本論文がこれまで地道に歩んできた一つの結晶として誕生した今、その喜びが、こんな長い謝辞を書かせてしまった。ここでは7人の方の思い出を記したが、もっともっと沢山の方々のお陰をいただいて私は今日も元気に生活をさせていただいている。本当に有難いこと、深く感謝しています。

文 献

- 1) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について 広島文教女子大学研究紀要 Ⅷ 23-38 1974
- 2) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について (2)——4年間の縦断的研究—— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74 1980
- 3) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について (3)——タイプ分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 16 61-72 1981
- 4) 秋山幹男・有馬道久 女子学生における自己と父母の認知について (4)——因子別得点をもちいたクラスター分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 20 57-68 1985
- 5) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について (5)——三者間の似よりにもとづく分析—— 広島文教女子大学紀要 (人文・社会科学編) 23 83-102 1988
- 6) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について (4)——認知タイプ別にみたY-G性格検査の分析—— 日本心理学会第47回大会論文集 505 1983
- 7) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について (6)——三者間の似よりと自己把握度—— 日本心理学会第52回大会論文集 31 1988
- 8) 秋山幹男 家族関係 今泉信人・南博文編 人生周期の中の青年心理学 108-122 北大路書房 1991
- 9) 藤井 虔 青年期における自己認知の発達 京都府立大学学術報告「人文」 35 77-91 1983
- 10) 岸本陽一 MPI, MAS, Y-G, CPI, MMPI の因子分析的研究 近畿大学教養部研究紀要 14(2) 1-8 1982
- 11) 鯨岡 峻 心理の現象学 第4章＜発達する＞ということ 177-255 世界書院 1986
- 12) マルティン・ブーバー 植田重雄訳 人間の復興 河出書房 1964
- 13) 西平直喜 新しい存在と価値の発見 津留宏編 青年心理学 138-144 有斐閣 1970
- 14) 西平直喜 伝記にみる人間形成物語 (2) 子どもの世界に出会う日 有斐閣 1981
- 15) 西平 直 ＜私＞をどう理解するか——H. ワロンの＜内なる他者＞を手掛りに—— 東京大学教育学部紀要 26 197-205 1986
- 16) 岡堂哲雄 青年と家族 青年心理 63 2-11 金子書房 1987
- 17) 大野 久 人格研究の動向と課題 教育心理学年報 31 68-76 1991
- 18) 斎藤久美子 同一化と人格形成 京都大学教育学部紀要 34 14-26 1988
- 19) 澤木興道 澤木興道全集第二巻 禅談 大法輪閣 1962
- 20) 鈴木鎮一 愛に生きる 講談社 1966

- 21) 鈴木鎮一 才能開発は0歳から〔増補版〕主婦の友社 1969
- 22) 鈴木鎮一 才能開発の実際 主婦の友社 1971
- 23) 高石恭子 青年期の自我発達と自我体験について 京都大学教育学部紀要 34 210-220 1988
- 24) 寺崎正治 パーソナリティ・テストを通してみた大学生の性格特性の逐年変化 人文論究（関西学院大学人文学会） 35 144-164 1985
- 25) 内山興正 進みと安らい——自己の世界—— 柏樹社 1969
- 26) ヴァン・デン・ベルク 早坂泰次郎 現象学への招待——〈見ること〉をめぐる断章—— 川島書店 1982
- 27) 八木秀夫 青年期に対する二つの見解 人文論集（神戸商科大学学術研究会） 23 79-96 1987
- 28) 八木秀夫 Identity-Status 研究の方法——Marciaの理論の検討—— 人文論集（神戸商科大学学術研究会） 23 281-296 1988
- 29) 横山紘一 十牛図の世界 講談社 1987
- 30) 吉本美紀 自我同一性の測定——自我同一性簡易尺度と同一性地位判定尺度—— 昭和薬科大学紀要（人文・社会・自然） 20 13-38 1985

—平成4年10月22日 受理—